

七 下したら更に擔げ板を

「至心信樂、己を忘れて、無行不成の願海に歸入す」。暫らく自己の領見を措いて、己を忘れて、先方の意志に聞けよ、徹見せよ。我慢の板は自ら卸されて、真心徹到の身となられやう。茲に新しい我が行くべき道が開ける。開けたなら、更に新しい板を擔いで進み行け。自己の所信に向つて立つ時、須らく兩擔板漢で、勇奮突進せよ。此場合板を卸してはならぬ。

此の場合板を卸しては、何方つかずの虻蜂とらず、厄介千萬なものになつて仕舞ふ。鳥獸合戦に内股膏藥をきめ込んだ蝙蝠のやうに、結局捨てられるが關の山か。母親が娘を呼んで「これお前も年頃になつて、方々から貰ひに來れど、これぞと思ふ縁もなかつたが、此頃二軒から云うて來た、随分相談してもよからうと思ふ。一軒は金満家なれど少し智殿が見苦いさうな。一軒は智殿は品もよく人柄なれど財産は少いと云ふ事。どちらも智殿は實體なさうである、どちらも好いと云ふ、此上はお前の心一つ、さあどちらか云つて見よ。サア、耻かしいのか俯向いて居る。ウンさうぢや、こんな事は云ひにくからう、それではこれ金満家の方へ行くなら右の肩をぬぎ、よい智の處へ行くなら左の肩をぬぎなさい、それ私は目閉して居る」。母親が目を閉づれば娘は心得たりと肩をぬいだ様子。目を開いて見れば、こは如何に、兩肌を抜いで居た。どちらへも行きたいとか。どつこい、どちらへも行きたいのなら、同時にどちらへも行けなくなる。此時こそ新しい板が必要になります。

胡麻鹽頭の分別男、どうしたことか二人の妻を持つて、ほくくして居る。一人は年増で、一人は若盛り、共に事情は知らない。男が年増の處へ行けば「妾は年も老いて頭も白くなつて居るに、貴郎がそんなに若くては、夫婦らしくもない、眞實妾を思つて下さるなら、貴郎の黒い髪を抜いて下さい、而し

て共白髪になりませう」と云はれて、成程と、男は唯々諾々、早速黒い髪を抜いて白髪ばかりになった。その歸りに若い方を訪れる。「妾はまだ花盛の若いのに、貴郎がそんなに白髪では、夫婦らしくもない、眞實妾を思うて下さるのなら、白髪を抜いて若夫婦になりませう」。云はれてみれば御尤至極、早速家に歸つて、痛さを堪へく、残つた白髪を皆抜いて、ピカ／＼光る禿頭になり、せめてもの耻かくしに、頭巾を被り、白粉ぬツて皴を誤魔化した。これならばと、若い方へ行つて、よく出来たくと褒められたはよかつたが「何故貴郎、家の内でも頭巾を被るのです」と、無理矢理頭巾を脱がせられて喫驚仰天。「こんな男は仕方がない」と振り捨てられて仕舞つた。これはしまつた、年増の方へ行けば「何故そんなに白粉などを付けるのです」と、いきなり頭巾ひきとられて喫驚仰天。「こんな薬罐頭は嫌ひよ」と愛想盡かされて仕舞つた。

二人にまで見捨てられては、今更に面目ない。一室に閉籠つて泣いて居たが、これではならぬとヤツと氣を取りなほし、百姓でもしやうと、愈其の氣になつた。けれど考へて見れば、高い丘には炎旱の憂ひがあり、深い谷には洪水の虞がある。よしこれは斯うするに限ると、一ヶ月の内雨の降る時は丘に登つて畑を拓き、四五日も経てば谷に降つて田を耕す。恁して雨が降れば丘に上り、日が照れば谷に下り、畑も半途、田も半途。上りつ降りつ、行きつ戻りつする内に、徒に春過ぎ夏去つて、丘は日に乾き、谷は水に浸つて、結句骨折損の草臥儲。こんな風で一生終つて犬に生れ、大河の東西に人家のある處に住む。河東の里に煙が立つと見れば、河を渡つて東に行き、河西の家に煙が立つと見れば、河を渡つて西に行く。東に行けば、まだ食物も出来上らぬ様子。西に行けば、最早食つて了つて残もない有様。彼方が早

過ぎれば此方は遅すぎる。早すぎたり遅すぎたり、行きつ戻りつする内に、河の中流に陥つて溺れ死んだとか。『譬喻經』の意

何だか馬鹿氣た話のやうな中に、動かすべからざる眞理があると思ふ。「ほんに悔しいあの人ゆゑに、お嫁盛もはやすぎた」。「あちら立つれば此方が立たず、此方立つれば彼方が立たず、兩方立つれば身が立たず」。「柳は緑花は紅、父は男で母は女」。紅の柳が出来たり、緑の櫻が咲いたり、女の父があり、男の母があつたら、それこそ大變、物の筋目は判然と一筋きつぱりせねばならぬ。大工もすれば左官もする、木挽もすれば機織もする、商賣もすれば百姓もする。何も彼も一時にと云ふ風になれば、結局何も彼も上達しないばかりか、疲れて病氣でも起し、家も身も亡ぼして仕舞ふこと必定。こゝ須らく兩擔板漢となつて、自分の唯一つの目的、それに一途に進む。「かくすれば斯うなるものと知りながら、止むにやまれぬ大和魂」忠義と云ふも孝行といふも、同じく君恩親恩の板を兩方に擔いで善き兩擔板となるを要するのです。